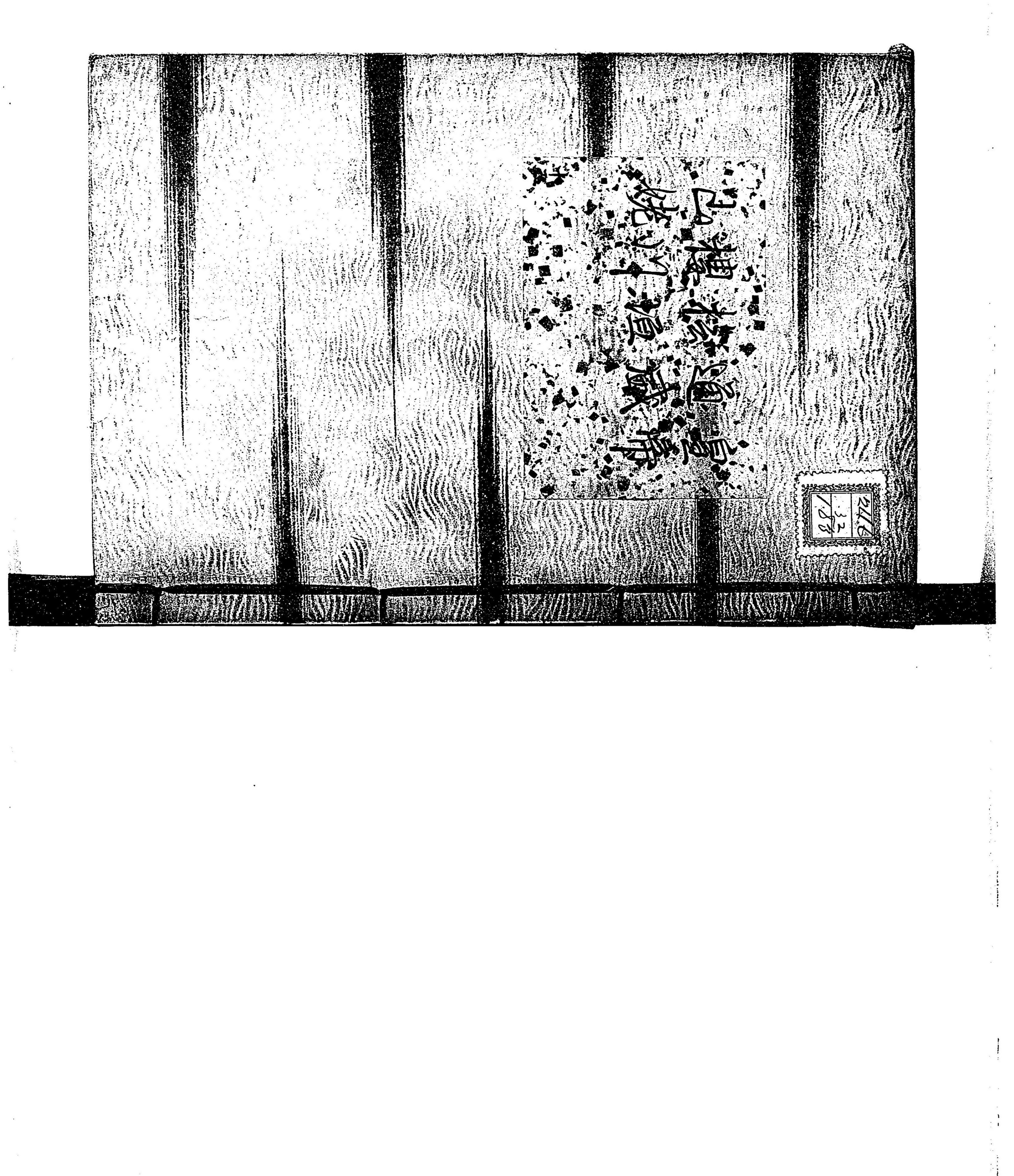


宗觀之家

明治
44. 6. 8
内交

三月　四五番目　略服飾

皇帝　レテ　老翁　チ方　揚貴妃
後レテ　鐘馗ノ霊　ワレ　兄祐
ワキ　女官皇帝
ワキツレ　大臣

七月　二番目

通盛　レテ　漁翁　ツレ　小宰相局
後レテ　平通盛　ワキ　僧

季不知　三番目

桜垣　レテ　老女　ワキ
後レテ　檜垣女　僧

三月　四番目　略三番目

樓川　レテ　女　子方　樓子
後レテ　牡女　ワキ　僧
ワキツレ　人商人
ツレ　里人

季不知　五番目　男ト女服飾

山姥　レテ　女　ツレ　遊女
後レテ　山姥　ワキ　月待者

皇帝

春の玄鶯遊よ入て、よもぎの蕚と專と
しぼ宮たかきい三千人。三千乃
寵愛一身よあり。かく類なき貴妃の
紅色美蓉たれお井。いろうへて
未央の柳乃かんを。　きぐよ
よわとゝ栄花露の命もいろ〳〵ん

心づくしなる夜の空ぶ水のまの
月も朧なる。雲井より歸る鳳ぐるを
わびしくなみだ。や鳴くなる。家のうちに
かなでし樂をくるよとて。送られ
ぬ物より參内すべきやうの
やう宮中をづまりわびて。心とも
まどひ節よみをしれもとに引るを

見れば。ぢもくつぎある老人也。そも
此きぬ物ありる者ぞ。是は伯父の
唐時の鐘馗といひし者の名第
かぶりぬるを。と疑ぶ。階みて頭を打
くだきぶと侵よ。おそ者の亡心を
追ありたり。宮人去りぬと申也
其まく都の中をきめ。贈官をら

れば大臣の御其亡心者仁乃為哉
今宴よ来まきれて　宴よく去
ろ呂れり贈官のこう緑袍と死
骸よりうるきうれんよ（恩）へうかく君
乃寵愛給ひ貴妃のやまふと平ら
ぎて幸物を見をしめすべしおろ
らべ伴に明皇鏡と似ぬ枕よ立てたき

給ひ姿と見ちんと　直奏
かくナドウ　我通力とれはつつ
楊貴妃の姿ちそ風を求めんと
ゆくもあくび其姿みそ乃所そよ
洗よりくいろよ貴妃ぎふきい
しう曇日乃ゆくもの朧月夜の
晴ぬ心きいろあるゑ　宴や宴とり、

上カヘル　ヨウロ

枕をおしべきちらもおくぶるまこ心
まをきうあるぶ。源乃家元の菖かれ
姿きそづつや　早上カル
あらべかく苦をみるべきうとかをうへ
てゆつでつ　かうもあぎび
ひれふしや　翠翹入主雀とりぐま
かぶ乃初もうつうつや枕きんぶ乃斜

紅乃世よ類ひあき姿ぶ。ぶうや玄雨九
風よ苦るぶかいだうのねみれる若の
ごうくありうきうれる明皇栄花と
極め世をたもちぶとてそもぶ給ふ
ゆ恋ぶうひあき貴妃よかく。契りと
てめうく年月乃玄霜九ぶかきと
苦みうぶ日たのくれさいで涙まつ

里ごとも絶ごとよりうるかるなさ中
あれど（上ロ中）乃ぐきがくしや世中の田
きぬさりの月の初のぐく迄
ま為び弛をるひくもあく秘曲つくし
笛作ごとぐきあれやこの契り天
あぐく地久きくてつる時もあるまじ（上大尺）
宮人と思ひしかり彼老人のとくしれ

ごくく明王鏡をとり出し所の御枕よ
わくべきあり（上大尺）勅使をつかもあるべ
きと月卿雲客一同よ明王鏡と取り
出し枕もみきちやうよ（御几帳）たて
うへて社わきをりそれ（上ニ中）かくて
暮かく雲のあ（上ニ）ぐよ風も
絵くぐのきもよだつ杉ま

ふるぎつや鏡は真うつちよ。鬼神乃姿
ゞうつりきる（上月早苗キ上）九花の撥と押乃
きてゞ。彼所撥よりたき乃笛
を打とり指とて。いちはやろこぶ其
亂色。かゞこようつりみしきれべみとゞへ
見と数流あつて。撥き痛鬼よのが
ちゞと。剱と撥て。立給へ。天よあゞり

地よまゝ下星。邪行自在と弼て
帝よ向ひ。りとおそば。剱とふり
あぎきり給へ。御の桂よ立かれ
て姿もみゞ。ぞよきを（早上静）ふぎや
雲景をそれく。宮中者りかや
きゝく。鳥動きる社れろうきれ
（はしこ五大慶）杖見へ。弟徳年中よ贈官きれ

し。鍾馗大臣乃精霊あり。扨も汝
君命令しの行ふ。妃乃やまふを
たゞらぎんと。通力をまつらく亭殆
をかんぐ。南無天形星王我剱除鬼
を。秘文をとなへ駒を乗て。虚空を
翔つて。手内をきり。悪鬼ひしと乃る
ごとく。なるきさつ。紙まつ

柱よりかくれきたる。鍾馗大臣精霊馬より
おりたち。利剱をひつさげ。祝をとなへ
明王鏡をもつて。給へば。鬼神の姿
かくれ。鬼神の通力自在も
うせて。れまつびつ。鬼
出るを。追つめ。給へば。敵をとびわり
ぶ。鬼王。落ちよ。あげるとのぐちで

抱とて引たるに。利鎌をかりあげ
ずゝぐるまきりたるし。庭まはぎ
すゝく怨よ。貴妃も息笑て此君の
めぐりとあつぎ。身は神となるべしと
ぎょくたいを夢にたゝまつりくて。楽
を夢とぞ。ありまをれ

通盛

早行

見へ出る阿波乃鳴渡よ一夏を送れ
僧みていは。扨も此浦へ平家の一門
果給ひたる所なまぐ痛わくなる
毎夜此所へ出て法経をよむ
なにはの人今も出てあはれなさぐやと
思ひ出て義経よまぐ岩根にまつ

程よう〳〵たゞ長閑といふ波よ。楫
音計り渡の。浦おかぜ。霄ゝあく
上ウレサレ声 もの寂しかぎろ鐘の声。此夜ふ
きこそ作入相でまれいつゝ長へ
程ゝ〳〵ゝ寂る日ゝ〳〵ゝ明ゝ日すぎ
七日とゝ〳〵ゝあひまゝ〳〵ゝ食べ
きれ〳〵ゝ出れば参よ頼まぬ、ゝ分れ

行末の日数也。いつまでせとべ日ゝづ
海はあまりよひまも浪小舟ゝ〳〵ゝを
軽ゝよ参の月ゝ〳〵ゝ命ゝたのめよつふ
上三月 べきうゝやうまゝあぐら心のおぐさむ〳〵く
月の出塩ゝあ風おぢそ面白き浦
秋の気色ゝ可ゝ〳〵ゝ浪のおとゝ乃
中よ雲つゝく。淡路鴻や鶴ゝ〳〵ゝきえぬ

浮世のわざ悲しく　暗濤
月を埋んで清光あり　あはれ
まのあたり火更ふけて　二人
歩む雨の芦間より　通る風あらでも音
しるあり　夢うつつ　経声
嵐ふつまつて　ゆるぞや　楫音と
いめからうと押へて　聴やをどやと思ふ

たゞや　波ありとも　沖より音するは　浪
ぞめぬ海士乃釣舟　はるかに　はるあらば
ゝ子細　波　ちらくを　絵へ　仏よ
隨ひ　ちよせ　二人の僧　岩
乃　いちりの　舟　昔の陰　あ
火の陰と　假初　経と　同じ　讀誦
方　経　いちりまで　ぞあ　ひと思ふ

しては　ワキ「よき燈には　なるとの海の
弘誓深如海歴劫ふしぎのきえんに
よりて。五十展轉の隨喜功德品
ありがたや此經の折しもてぞくらき
浦風も。芦火の影を吹たてゝ聽聞
するぞ有難き。龍女が變成と聞時は
嬉しく。祖母も頼もしや祖父はいふに
及ばず願ひも三つの車の芦火は清く
あかし捧げ候へ御經遊ばせ
ワキ「あら嬉しや火の光にて心静に
御經を讀奉りて候。それ此浦は平
家の一門果給ひたる所なれば毎夜
此磯邊に出て御經を讀奉り候が
わきて如何成人此浦にて果給ひては

ゞ乗くに拠諸人伝乃ごとく成へ
うれぬ海も深く行ぬ中も
小宰相局こそ。や。諸せは拠諸人
上
芸程よ平家の一門馬上と改め海
士れ小和よ来うつり月よ棹さし時も
あり　家だもの彩の去ときまの
浦ぞ敵よ打ちまて入らと惜

む武士打ちうづ鳴や法螺ぞ。の波
あとよ見よきうり　芸程よ小宰相
の局乳母をちづをめ。よ行と思ふ
我者ものきへ都よとゞまり通盛へ
討さぬ。と頼みぬ。おぐらふべき。洪海よ
況まそとて。浸漬手と取組ふ
ゞよのごと　芸ふてもつれ海よ弘

しづまりぬらめ 沈むべき身の心にや
涙の浪で浮ぶ顔 西へと入し月
の入る其方もみえず大方の
夜や霞むらん あらぶも共に曇る覧
乳母泣く泣く引きて此時の物思ひ君
一人に限らじと まりへとて御衣
の袖にすがりつきしを ふりきりて海に入ると

忍ぶ老人も同じみち塩の底のみく
づと成果りし 此八軸の誓ひに
て 一人も洩さぬ方便品を読誦

シテ出ワキ如我昔所願ト文謡フ

せる 如我昔所願 今者已満足
化一切衆生 皆令入仏道 通風丈夜
御経に引まそ 立浪の 世え加経
み法やあら かきりやあきもあらめ

きる法師の波は浮ひもくだけて絵にかいたる
ある人みてまゝ女まゝ名計なまゝ
清異ぬあゝ浪乃門波れあるとは流果
し。小宰相の局乃幽霊也　そ一人者
甲冑を着し。兵具いとゝくみしたがへ
ぬ。甲冑人みてまゝ女まゝ　見へ出
男乃森の合戦は松いとゝ。を天下は

あゝ武将たつしほまれと。都あれ三位
通盛。と。と詰らんを為は見返顕き
出るあり　作洲一谷と申は前へ
海上に漕しきひよどり都城は鳥あら
でいかきりゝく獣も。あ。と当つべき
地よりたゝ　吹幾度も逆手れ陣
を心得おきゝ。もねと乃一門

はりつけにする。通盛も其隨従たちまち
ぎりもむ。我陣より宰相殿
向ひ既軍明日よりまいりぬ。痛
つやはり通盛なれば此うちは頼
もべきの人なり。やはきもかくも成ちらば
なまじひ姫とりてたび
給へ。ぞ情なり盃。通盛酌をとり

ぞ。はちづきの霄。まそう。さくは成
もつぐ。たとへば唐。頂羽高祖の責
とうを。張良氏が策も見よ。いうで
増るべき。燈暗うして月。光よきて
向ひ語り慰。家よ人言葉。紙登
守ぞや甲冑とよろひつ。通盛に仕
みぐ。など遅かりぞと。なげ

其きこの笠をづつや紙や身わが策
といひおろ他人より狩もづつや眠
ここ所ゐ所ゐ行もゆれ無一合の可
ゐてちらべそて。
からを面の山乃なかこづひろ
ゐ程よ合戦を中所り。但馬守逆
改もりや討きぬと宮内上ヲ拙薩広身
忠度の果いよ居部乃六弥太

忠度くこを討きうべ天晴通盛
をのある侍もゐれ。討死をんと待ふ
ぽそのあきをみよき敵よ。四国住
人ぐぶ村の源五重章ゐ鞭をあぎ
てかきたぽ通盛をうもちゐ
ごのぽぬきのまヲけたる太刀あれべ。甲
乃ぽつかうちをとうちゐをたち

みてちぐへ共よ法華道の者を
愛慕あたれしを存き居よく弔ひ
てつび給へ讀誦せしを時々く
惡鬼ところとやつらぎ悲傷慈悲の
姿みるく堂に蓮も家よ来迎も成仏
し脱れかと成かくぞ力強きく

松垣

早内

昔く肥後出国岩戸と中山ま
居住れ僧みるくは。扨も此岩戸の
観世音は霊験の法ありれ
は猶く未能しの有の致景をみるよ
南西は海雲漫々として萬古心れ
中ありへまれて慰れほく

致景あつく郷里をはなれまことよ
住べき霊地と思そめ三年の間に居
住つゝまりにくしかれど実よ又百ゝも及
ばじと杖ほこき老女毎日あゝ乃水
をはこぶ来りはべりてゝ
いつなる者ゝと名を尋ねやと思ふ
かき白河の水くめ〻月も秋

屋ぬしはらん（サレ）丈籠鳥は雲とゝひ
帰雁はあと思へ人間も又是同（コトヒ）
貧家よ親をもなく賜きよ
故人ゝゝ老痛裏へかゝもなく
露命きはまつく霜枯草に似たり（ウ）
おゝゝ水は気よの甚ことわり（下ニ）
（上ニ）ゝ流ゝ来るウ家は有も白河のウ

水ぢ深きに罪をうしやもそと
捨人は値遇もとそこに見出せ山下
菴原よ墓きりぬきいほよ墓
みそり いつものことくきつも又は
ものあきてしまりてい 毎日老女
乃歩見ゑこも痛ういうこうしへ
せめくいかやうれすみて社ぬ乃

罪をもたくらべ今れぬ流法を吊
ひ給へ明おいまるまりしへ出
眼中しいん 潜く流れ乃名とお
のり給へ あみと名をおのまとしや
中こ乃ま 見へ思ひもよらぬ信
出ぬ彼は撰集ぬ年ぬれを我
くろかも白ぬのこつい級遠考よ

さるかおしく讃しも童子なり昔
筑前の太宰府に庵に檜垣しつら
ひて住し白拍子後には衰へて此白
河の邊に住し也　ワキカヽル「実にさることを
聞しおりし其しら川の庵りのあり
し藤原の興範通りし時　女「水やあ
ると乞給ひし程に其水汲て

参らするとて　ワキ「みつはくむまで老は
讀し也　上同「ありもさつるむせとやうく
唯白河の水にはあらで老てかゝめる
姿をもいさゝ川へくみともにかくもあり其
志るしとも見給へ彼白川のほと
りにて我跡とひてたへと夕
まくれにてうせにけり　中入　ワキ「扨さ

古代松垣の女郎あらわれ我が詞と
かりそめなるうやまちつゝ世代亭物
うと思ひおもうをそ寿のきハ（上ヨウ）つき
屋たちやく日も（元）蒼てウ。河霧
ふゝく立てまる。陰は唐り代（下）灯の
ほ乃うよりんかる。（八九）きちよく（十）
あら方雑代弟ひ（下女房）やお蒼有難代常ひ

や那（上）風緑野よをさまつて（煙）えん
てうおほし。雲（岸頭）うは定まつく（直）（條）
月桂まとかも朝は紅顔あつく。世（上）（下）
路はたのむ（地）ゝを（地）ゝは白骨（女）
とおつく郎原はもちゝ（女）ゝ為乃
有模（地）世常付まゝ（女）猫は生死（下）
乃ゝとわりを論をちる（日）いを（天元）と限る（下）

あらひろや老サといつを分おあ
賢るとえつく朝ときり居きる必
誠と弱をちらん弱うは昊と朝務
ちらん（上ヨリ九）ふまやおきを安分多つる
人あり姿とあらひ弱ふ
しは跡とひてあらきん（女）ちらハ
姿と見りて備法法と愛べき

なり人よおあらひ弱ひろとよ
中（ヨリ）人よ顕ひ有まはやく
姿とれく弱人（女）深くえりれのほ
もせはひれをみしぬれとろへを弱白
ひのうつひうを老の姿そ恥き
芸（ヨリ）芸清りれ法方様やおかも執心
れ水とくを猫色の姿れく弱ふや

ぞやく、深ひ給へ、（女詞）我古い葉女のほ
まれ学ん腸きぞ。甚罪ふるき故よりも苦さと三昧ふよ。熱鉄れ桶を
ぞのひ。猛火れつるへとちきて洗水を汲
（中詞）甚水湯とあつて我元とやくるす
陽を。おきれた。（汁詞）洗狂れた僧れ値遇
よりれてつるへ。あきた猛火いあり

（口半上）ちらい固果乃水をとる。甚執心を
ふり捨てぞくしくうひ給へし
（女詞）してくちられた僧乃ため。洗かを水
を汲ほさへ。罪もやあちくあるへきと
（口半上）思もふきちよ。衰乃。狂の露のを
きびき（女詞）かを白ぬ乃月ぞ。衰よ
（口半）ふこと。（女詞）水を。いさ汲ぞ。（上詞）つるへ

乃水よ影たちて秋と月やのかすん
元 クリ地
元弥星は鼎よ小溪は水とらえ
ぬ炭の炉よ南屏の梁とたく
サレ女
更氷いろより出て水よりも寒く
青きより藍より出て藍より深し
本はうきゆのの報ちらへ今は苦き去
下女
をきて いやや増り恋る思ひ乃色
紅葉は源よりとくつまべ乃
うを縄とりなしうきを古も紅花は
恋のあった紅葉の秋は今宵も一日
恋宵とやあぬ恋の桜華花は
ほまれもいとまきめてぬをうつくき
紅顔の翡翠はつら花をを桂の
まゆも霜かりて水よりつる面影老

袁かぶを流してみたりよりてし黒髪へ
出水もくつ塵芥かりきるゆ乃
力程う悲き。うやかしよと思ひ
出れいあつや。其白波流かきし

菊原の黒花。其いすへ乃白柏子

七つと有しう。昔の花袖今更

色もあさ夜ゆうき袖とかしぬ

心そつらき陸奥のきぬ細布胸あ

さ。伊とい白柏子其行もうきの有へき

ゆしく共とても。昔手弱し筆初きへ

ぬりても今いかあふまとと奥花

きりよ宣へ。ぬまるあさ袖

露うも拂ひ筆出ひ。檜垣の女乃

ゆ芸果と水もそふつゑ乃縄の

つるへの縄のゝ（元）（上地）
き白川の（元）あらゝ（元）の浪白（元）河の
水の長と（下女）きるゆゑよ見くまて歌き
出ふれなり（元）咽（元）たつた音
とこそ（元）たゆきうき（元）草の水（元）きもと
ひろくまわらもそつ見をうゝへて
さひ給へ

橋川

（男）
かゝ模ゝ者ゝ東國方ゝ人高人ゝそゝ
我久敷都ゝゝ洗度ゝ旅営日
向ゝ行下てんゝ明ゝ暮ゝ程ゝとゝれ
きゝ人と買とりゝゝ彼人ゝきゝれゝゝ洗
父と母ゝ代とゝ桜ゝ馬場の西ゝく
橋ゝゝ母と寿て悩ゝとゝけとゝ伝ゝ

程よ。吳う樣ぢよ。母の方へと急ぎ。洗
あつりまてあつりぎに作。出て書面を
ナさぢややとなほ。ぬ。ぬ。書面ナ。樣ぢよ。
母乃渡りしかい（シテ女ノ方）祖母ちくわつりしぞ
男 ちんぴ樣ぢよ。ぬ。方より出文。代。文。洗代
物と。惜よ。面ヤ。をと。伝。程よ。昊。迄持
て。手りてしぬ。かまへて。惜よ。面ヤ。をと。

女 乳男ひよらびたや。をと。文。をとこうぢるよ
てしぬ。侍。をと。洗。年月の。洗。有樣。みる
を。あまりぬ。ぬ。ぬ。ぬ。さま。ひと。商人。よ。方。を
賣てあづまぬ。方へ下。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。碁。ぬ。う
まづまづまて。物と。や。吳。ぬ。や。早
人。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。方。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
見。を。出。乃。緣。て。ぬ。樣。を。ぬ。ぬ。

給ふべし。唯だ一人の孫こそ
とうとへ名残とて行まう
て母まいる。獨きやの
草の戸乃ぐ。哺一筆てつき時
をぶられこそ慰まよ。ちりとその
我軒。神もこれ花嫁や姫の伝氏子
あるあと探ぶとめくびに給へちあき

故郷のかへ行まう
明暮とたへて住べきあらまべ。我子
れ行ぬ寿とて。泣く迷ひ出くゆくく
比伝えて探ぶ山路乃まよい
うぐ母 早内 きい常陸国いうべ寺乃
住僧まてい。早まよ渡りいとき者の人
出ぐ出ぐ出ぐ愚僧と頼ま由伝

程に陽明門契約を前にしてゐる又洗
あくりは撥げどもくさりの名前ばかり
と盛の由なしは程にもきまぬ人と伴ひ
ぬ今撥げへと名乗り上手つをべにこの
をかいもの花盛雲の林の陰者
きみどりの空をうつろや松の蟠色
をまめきて昆を浮み苔の波撥げよ

一元一ニニ男
一も言はきりくしいはんは行とて通く
ぬ出作で物やしくしは口キ何さ出作で皆
物供やしは程に出松りありくしぬ蓋
見下や作花ぬ今をきかりとみてしぬ
男
中くは花ぬ今うぐ盛をしぬまの家よ
面白きはのぬ女物狂のぬぐつをまき
すくひ網と物ちくぬ撥げは流るまれを

よく候はゞいさしらびにおもしろう狂ひ候
是は猶以ひて此物狂をと狂はせ申す人へ
子も刃を手に持たれ候へ　早「いかにあれ
物狂を此方へめされ候へ　男「畏つて候　いかに
く彼物狂はいつものごとく狂ひ網を
持て此方へ来れと申しく　後レテ女上「声めずらしやあき
ある道行人桜川には花の散り候　散り

がくまで成するとや　やあらあさましやだによ
げにやさくらの名に流るる花をや
掬はん花ちりかかる水のまにまにとめくく
まだ山も霞みわたりし時は
妙なる花やさくらがり花やうく雪乃
色桜ぞあや　翔　桜花散りぬる風のなごりには
地「水なき空に波ぞ立つ　女「思ひも深き

花の雪ちる海の川やらん（中上）　月（中上）

出たる物狂の船故郷を旅宿日向灘の

ぢを思ひ出るとうもあるく。どう乱心

づるの海山刻く箱崎の浪立ちく

まで浦又い筑紫の海ちく常陸と

うや道ちがえ親ぶ道なら

ぞ。ちがえ。いうまきん寄まる

名に流れたる桜川どうぞ面白き

名所あり。ぶまきまれども桜ぶあれば

ぶとといひ桜ぶもあつて

桜桜ぶよ　散うる花の雪とくみて

ぶから花衣の袂乃ぶ殊さを

上三月　花鳥の立ちまつ親とよ乃ぶく。行

ぶも去らであ風ざらぶひあのながぢ

よ初とろうへだ。縁あつても親と子のあも。
忘れをぎ初ゆあらん。やうてやまづ
袖みをごをり者くみてびせとい生べある
初と我子れ花者をどぶぬく洗初
狂ひ方まて有ぎを。立ずりて寿ゞや
と思ひ。初ゆよ見ぐ成狂ひたことれ国
里ハびくれ人ぞ。見い遠乃花業れ

者みてハ行とちくらやりよ狂乱
とい成たるゞんば只やとり者忘れ
がてこのみどりをたて離ちくハ程よ
思ひび乱まくハ草痛ゆやぶ又見
ナをびうつてきまちく洞ともち流
る花をひらひ初ゆまつ人唱伝ゆ乱色
みて後ちくハ行とまたるゆまちくハぞ

女 けんぶ我郷はいかとぞ
姫とやしらぬ神の御殿入ぬさき
べ別きて我ぞ長浜の御子あれば。櫻
子とんぶそしらぬ神の名を咲
や姫尋るまれ名を桜子又洗川も
けらしぬ名もあり。花の散を
ぬぶのもせぬや思あり 調と仏べ

面白やぎよ仁ぶを縁者者をさべり
きまりより。洗東路の櫻川色
ぷりぬもえんよ女 洗川のお
よ打ぬ遠につきくろめいよあり
波貫ぶ上ぶ上 ぶと昔見定
そぷるきさ花の都よも 未見も野
ぬひぶ国よ名も櫻川 女 なりと

きて　常よりもいきべよあまきべきくら
げ。ぐ。波の花とそ。まわくよすらめと
読たきバ行う宮も貫之をみるきの名
つ。ゝ物るよの揺げ。ぎでの自浪ぎげ
きべ。震う流も。ぎろうきの鴻れうえ
く水乃花ぎよ面白。河瀬ぶく
男　勞よ。洗物狂ぎ面白うくるとと伝ぐ

男　ぎふ。ぎ行とて狂ひ。ぬぐ　ぢんぢくる
ゆ。ぎる揺ぐ。揺げ。花のちとと。えべ
狂ひ。狂よ。ぐる。ゆ。きくはめよ。あきうぐる
ふくゆ　男　ぐ。ぢ。狂ゆ。せ。ゝ　心ひ。ぐ。蒼
咲ぐ。俄よ。山ぢ。ろ。の。ぎて揺げ。ぶ花
つ。ちりゆよ　女　ぐ。ゆ。ぎ。ぎ。と。夕。山風の
奥。ぶ。ぢ。花。ぎ。ぶ。ぐ。ぢ。め。れ。流。ぎ。ぬ

さ花よ花をくゆん　上ワキカル　こゝとみきべ山れ
ろ　の　ぬぐ乃　梢よ　ゆ　落く　女　花のみら
さゆ　鳥の　ワキ　浪　こゝとみきべ上ウヘよりちる
女　桜の　ワキ　しかきう　女　浪ら　ワキ　花こと　女　浪キ　巻
つ　雲れ　ワキ　ぬむ　上ウ　ちきづづ　ゾ　イ　浪も　イ　桜ゾ
ヒニ　ぐ　流ゆ　イユ　花を　イコト　女上ト　花れをとゆ　ヲ
ぬ　へら　ゆ　ゆと　ワス　れ水の　ニラ地　ヌルハゾ　ラ　ゆと受たる

花れ　女ト　ヌル　ヌ井　氷流　ヌル　花れ　ハ　ちく　ゆ　ゆと
しゆへよあ　ゆ　地　ワキ　ヌ井　ヌム　風たらて
鶴ら　ウ　ウ　ウ　サ女　ガン　月　花紅　サ　水と　ウ　洞　ジュ　樹
緑よ　ゆむと　ウ　合　ウ　ゆ　ゾ　花　ト　錦よ　似　ゾ　ゆ
洞　ドウ　水　ヌ井　ゆ　ゾ　ト女　面白や　思
ゾ　ゾ　家　ゆ　ゆ　ゾ　ゆ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　桜
ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ
ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ
ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ
ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ　ゾ

名も有らぬあしびあべ揺ぶれ是
又他生の縁成べし　宮や年をへ
て苔の鏡と成水へ散かゝるとや曇る
と言へり成ちんりぬまべ仮へあくたよ成
苔と思ふ方も拙いうよ我も夢
なるとも苔のそとみるゞうわ言れべ
情より。たゞよ散ぬる花あれば落ても

水の気とゆ白波の花よりも。別し
て人うは花ぎゝぬ悔のやちゝび百ふ
鳥花よあれかゝあゞ言ぎちれ紀
程ようらやまれゝく。震と気ニ。露を
ゞ上安
ゞめる心あり　ちるまても名よのミ
ゆくゝるゞゝと思ひわゝり揺げれ
浪かあゝひゝ掌のいごと引よちる

花をぬぐはなきづと水をきぬ空を
たゝへてくうき浪つの花ぬれぐらこかきまく
をもかづきれや見とても浜花咲や
姫の陰形水の花ぬれぐもよぎく
ふる水を陰と濁れと狭ひひとて
をぬぐをとらむて花よるべの水を
きとめく撫りはあきうよ ほうら撫

乃くどゞい散ぐうらうあるぬ花もうし
風をつらちきぐさそ〻さうへだ
ぐちる花ぐらかきくのこ詠めしい
あ青柳の急桜かぐくら
雲と見へみよし野のこよりぬれ
みよしの門ど藍波乃花と数ぐ若
ぬまと魚やかくらまぬ人い撫魚とぬメを

あつて（上元）やゆ（行）きまも白妙の花も桜も雪
も（波）なみおがらつよ（強）きくひなつめ（棘）れ
ども（尋）ぶいホどの花城を我（が）寿ぬる桜（やア）
子ごてもひ（イ）き我（が）さらぶそ（ゴ）ひ（イ）き
（吉ジ花）如（ウ）ゆ（ゆ）やいつよ（ゴ）狩（ゴ）べの（ゴ）ゆ（ゆ）の（ゴ）ゆ（ゆ）の（ゴ）紫（ケ）べつ（ゴ）ぎや
おぷ（ト）ふを（ト）筑紫（ト）の（ゴ）人（ト）の（ゴ）見（ト）（女上）今（ヤ）迄（ト）行（ゴ）
いつ（ス）やきぬ（ゴ）ものの（ゴ）筑紫（ト）べ（ト）ゆ（ゆ）の（ゴ）行（ゴ）へ（ト）行（ゴ）

乃（オ）ゆ（ゆ）為（メ）よ（ヨ）同（ド）行（ゴ）よ（ヨ）（地上）行（ゴ）ゆ（ゆ）う（ヨ）へ（ヒ）つ（ヅ）むべき
親（オヤ）子（コ）の（ゴ）契（ケ）り（イ）ち（ヅ）ものきぬ（ヌ）花（イ）桜（ヤ）ぶ（ブ）ゆ（ゆ）
（女）見（イ）ぎよ（ヨ）桜（ヤ）ぶ（ブ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）べ（ベ）夢（ム）ゆ（ゆ）と（ト）兄（ル）
ぶ（ブ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）（中）ゆ（ゆ）ぶ（ブ）ゆ（ゆ）（上地）三年（ミセ）
ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）
日数（カズ）ふ（ヒ）りて（テ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）
（女）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）
ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）
ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）
ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）
ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）
ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）ゆ（ゆ）

花の良づせれ。つゆあり。きそ賞美
あり。時も鳴言こそ姥。涙ありきれ
かくてともあひ言葉ありく。母をも
たまけ模ようく。俤果の縁とありま
きり。二世安楽のえん深き。親子乃
道ぞ悔りかくまく

山姥

御物
善光寺

善光ぞと。影たの母。佛乃御
寺尋母。見へ都ぞ住居仕る者
みてゆく見よ渡りは事ひやく魔
山姥とてかくれあるを姥女ぞ
が模よ名とヤ謂。山姥の山巡り
出ると云りと。曲舞を作つく唄ひ

なるより京童部はやあらはしてはや
洗はい善光寺へ詣り有たさ由哀れ
程よ。果ち偽ヤシ。吹今信濃国善光ち
へと言ふ都と出くさ浪や志かれ浦
船こがれ行末いあらちれ山都て。袖よ
露ちるまでの橋。やきて来あつる都路
の橋思ひや社ひくらう御堂 上京四人 樵波立
塩ぶ二のウ。あ安宅の松乃夕煙きてぬ
うきの月れ罪ときてる程波のつるぎ乃と
ある山雲踏うかげす三都路の国の事城
里とへいぐ彩雲ぎうちひ川みも
遠ふりく市ワキ汐 多程よ是ワや都
仮越中れ境げよは昌まて。皆見よ
ぜ住ひて。狩と道れ橋弁ともは寿あらう

ぜゐるまじく候
ツレ詞「げにや常に聞く西方の浄土は十萬億土とかや是は又弥陀来迎の直路なれば上路の山とやらんに参り候ふとても修行の旅なれば乗物をば是に留め置きかちより参り候べし
ワキ「道知るべして参らせ候へ
ワキ「不思議やまだ暮るまじき日なれども俄に暮れて候よ

扨如何と仕るべき
シテ女上「なうなう旅人お宿参らせ候はん是は上路の山とて人里遠き所也日も暮れて候へばわらはが庵にて一夜を明させ給ひ候へ
ワキ「嬉しや俄に日の暮前後を忘じて候軈て参らうずるにて候
シテカル「今宵のお宿参らする事とりわき思ふ子細有り山姥の歌の一

節（フシ）謡（ウタ）ひ（イ）くゆかさを行人年（トシ）月（ツキ）の望（ノゾミ）を
里都（ヒナ）乃思出でとなすべし其（ソノ）為（タメ）に社（コソ）
日をくらし宿をも参らせて候へ如何
様（サマ）にもうらみを行白々（ヨウドウ）
〽（ワキ）見へは思ひも
よらぬ事を承る物かな扨誰（タレ）と見申され
て山姥の事をば一節（ド）とは御望候ぞ
〽（シテ）いや何をかつゝみ給ふらん　あれにましまさ

はなりはひやくまん山姥とてかくれなき遊
女にてましまさずや先此哥の次第を
忍ぶよし足引（アシビキ）の山姥が山廻りする
と作（ツク）られたり意面白やとて曲（クセ）舞（マヒ）よ
りて乃名（ミヤウ）を得たる遊女の山姥をば如何成
者とか志ろしめされてかぞ
〽（ワキ）山姥とは山に住
鬼（キ）女（ヂヨ）とこそ曲舞にもみえてはべる
〽（シテ）鬼（キ）女（ヂヨ）と

はをんなの鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも
山に住女ならば童が身の上にてはさふらはず
や。年比色に出させ給ふ言の葉草
の露程も御心には懸給はぬ恨申しに来
りたり。道を極め名をたて。世上万
徳の妙花を開く事。此一曲の故なら
ずや。しからばわらはが名をも弔ひ。舞

歌音楽の妙音の。声仏事をもなし
給はゞなどかわらはも輪廻を遁れ。帰性
の善所に至らざらんと。恨をゆふ山
の鳥獣も鳴添て。声をあぐるの
山姥が。霊鬼是まで来りたり　ふし
ぎの事をきくものかな。扨は誠の山姥の是
迄来り給へるか　シテ我国々の山めぐり

ぱ、を家よりすゝめる人の。我名は徳を
いやゝ為也。遥ひ給て去りて。我妻
執をうらみ給へ。況とうく辞し給
ば、恐しやの。死たゝめやのうりあんと
やうぐ。かをなぐら時のうてうをとるや拍子
をとをとをまば。志ばちを給へ中ちらば
暮るを待ぐ月乃表を眺ひ給ぐ

我も又。真の姿を影べ。そのやか
ぎろふ月の。けちかきだよ。影るを
急ぐ海山べ乃。雲よりとかを添て
沈むうぢかべ。とよすがらうひ給ぐ
其時我姿をも。あらわ衣袖つぎて
移り華をまづべ。ぱつとぬれば
其まゝかさきぬ。やうよきりく

ツレ上 ゆり出すのみぎはの波よ波と打ても
ほえぬ犬ぞ詞とたゞ一人 上 松風さま
ナニ 笛の音 色冴わたる谷川よ 上 入 まづ
はしぎる曲水の月まさやむ三日月の
なレテ 一声 其物をごとの深谷や おあらあすごの深
窟や 上 宮 林 鳥 とうつる 見 おく
前 生 業 慢 深野 花 借る

天人 中 なども 幾 生 の 善 を 積 ぶ 上 や
善 悪 不二 行 とう 積 行 とう 積 ぶ や 萬
箇 目 前 境 界 隱 阿 彌 々 きんぐうとして
上 いたほ 滅 ぶ 上 ぬ 及 ぬ ぬ ぬ ぬ
こう 青 巖 形 と 削 入 ぬ ぬ ぬ ぬ 水 入 ぬ
中 沼 ぶ 家 よ か 碧 潭 の 色 と 深 出 を
上 ウレカル 忍 や 月 もこ ぶ き 山 際 より 其 ま

餘りの事のふしぎさに更に誠とおも
ほえぬ鬼女が詞をたぐへしと松風も
吹笛の聲すみわたる谷川に手まづ
さへぎる曲水の月に聲すむみ山かな
一声 あら物すごの深谷やあらものすごの深
谷や寒林に骨をうつ霊鬼なく〳〵
前生の業を恨む深野に花を供ずる

天人はなほも幾生の善を喜ぶいや
善悪不二何をか恨み何をか悦んや萬
箇目前の境界きんがべう〳〵として
いはほ峨々たり山また山いづれのたくみ
か青巌の形を削りなせる水又水
誰が家にか碧潭の色を染出せる
恐しや月も木ぶかき山陰より其まゝ

きしたるを探だせば其山姥にてましま
せば　シテ詞 迚もやがて出初し月の端の
気色をみるも志らめきすべし我に恐
れ給ふなよ　ツレ さはいへどおそろしう
ば且其暗き夜ぎれより顕れ出る姿詞人
ならず　シテ詞 髪には荊の雪を戴き
ツレ 眼の光は星のごとし　シテ下 扨面の色は

ツレ さに塗りの　シテ中 軒の瓦の鬼のかたちを
ツレ こよひ始てみる事を　シテ 何にたとへん
ツレ いにしへの事　上 鬼一口の雨の夜に神
鳴りさわぎおそろしき其夜の思ひ
志ら玉か何ぞといひし人迄も我が
身の上に成ぬべき浮世語も恥かしや
シテ詞 春の夜の一時を千金に替じといふ詞よ

清書月は歌はきへ乳のつゝ面ちうよ行
逢人の曲乃ぞ程もつゝ長よぞやく
唄ひ語べ　きよ洗うへいともかく
そいつよなだぬ中よ　老れ山鳥
羽をきくく　鼓い離るこ　雉い白妙
雪をめぐらしてこの花つ　雉波のこと
はをあらぬ　上弦月こ　よし見れ山うどづく

山姥　八

山出りするぞ苦くま　大山といつて
ちりひぢりよりれて。天雲のつれきん
ぢうの峯海きに苔れ露よも走でを
てぷうとたり畳岩ぢんもおつり　洞
ぞきを岩の老情よ響くみびれ谷拝音
をきくたよりとあり。老よ響うぬ谷も
ぐれと。望しそ空かくや鳴　とよ我

山姥　九

住山家の気色山たかうして海近
く谷深うして水遠し前には海水
瀼々として月真如の光をかゝげ
後には嶺松巍々として風常楽の夢を
破る　けいべん蒲朽て蛍空しく去り
かんこ苔深うして鳥驚ろかぬも幽つ
べし　まち遁れがたきも去らぬ山中に

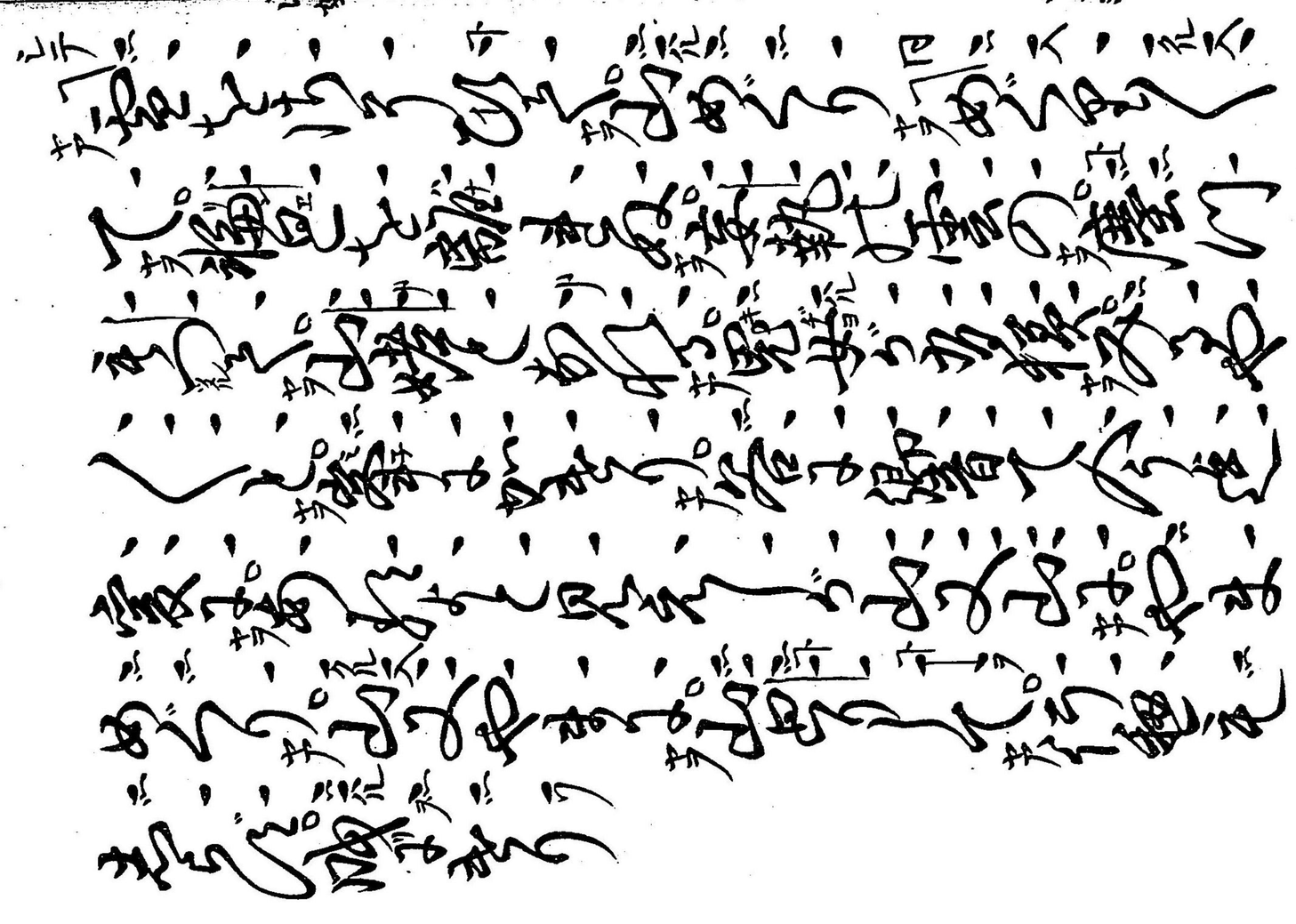
おぼつかなくも呼子鳥の声すごき折々に
伐木丁々として山さらに幽かなり
法性峯そびえては上求菩提を顕し無
明谷深きよそほひは下化衆生を表して金
輪際に及べり抑山姥は生所も知らず
宿もなし唯雲水を便りにていたらぬ
山の奥もなし　然れば人間にあらずして

とく。隔つる雲の分とくべかりよ自性と
変化して。一会化生の男女と為て。目前よ
来れば。其形一如とみる時は。色形臭穢空
きもまよ。絵法あまきべ。世法者煩悩あれば
菩提なる。佛あまきべ。凡夫あり。凡夫あ
きべ。うべもなり。柳なり。花は紅井
の色。掬人間よ。掬人間よ。掬人間よ。掬の

掬路よ。通る花の陰。休むもみて。扇を
月。法華よ。出生。選るもの
あり。又。或時は。徹脈。たつる
まどよ。入。枝の。管。紡績。宿
よ。を。貢人。助。わざもの。乃
目よ。みらぬ。男。や。人。云。と。
蟬の。唐衣。拂。ぬ。神よ。ぬく。霜。歩。

月はうづもれうちもせぬ人のまくら
後まもなく群雀きれ破れ袋の苔ぐう
つゝ山うぐわぎあれや都より歸りて
世ぐりよ物ちきをたゝと思ひ出も妄
執なたぐうち捨よ行ずりもよ見宋
の山姥ぐ山路をそるぞ苦くまつ合
宋乃 山めぐり五過り 一樹の陰一河の流

ぞ見世生の縁ぞかまてや我名と
夕月は浮世とめぐるひとつも狂言綺
語道をぐよ積業乃因ぞかゝ名
強とやいくゝ後やの雲の情
よちくゝと待花を尋ねて山めぐり
秋いきやきを歌と書く月みるよ
みて山めぐり名をきちく行時あれ雲の

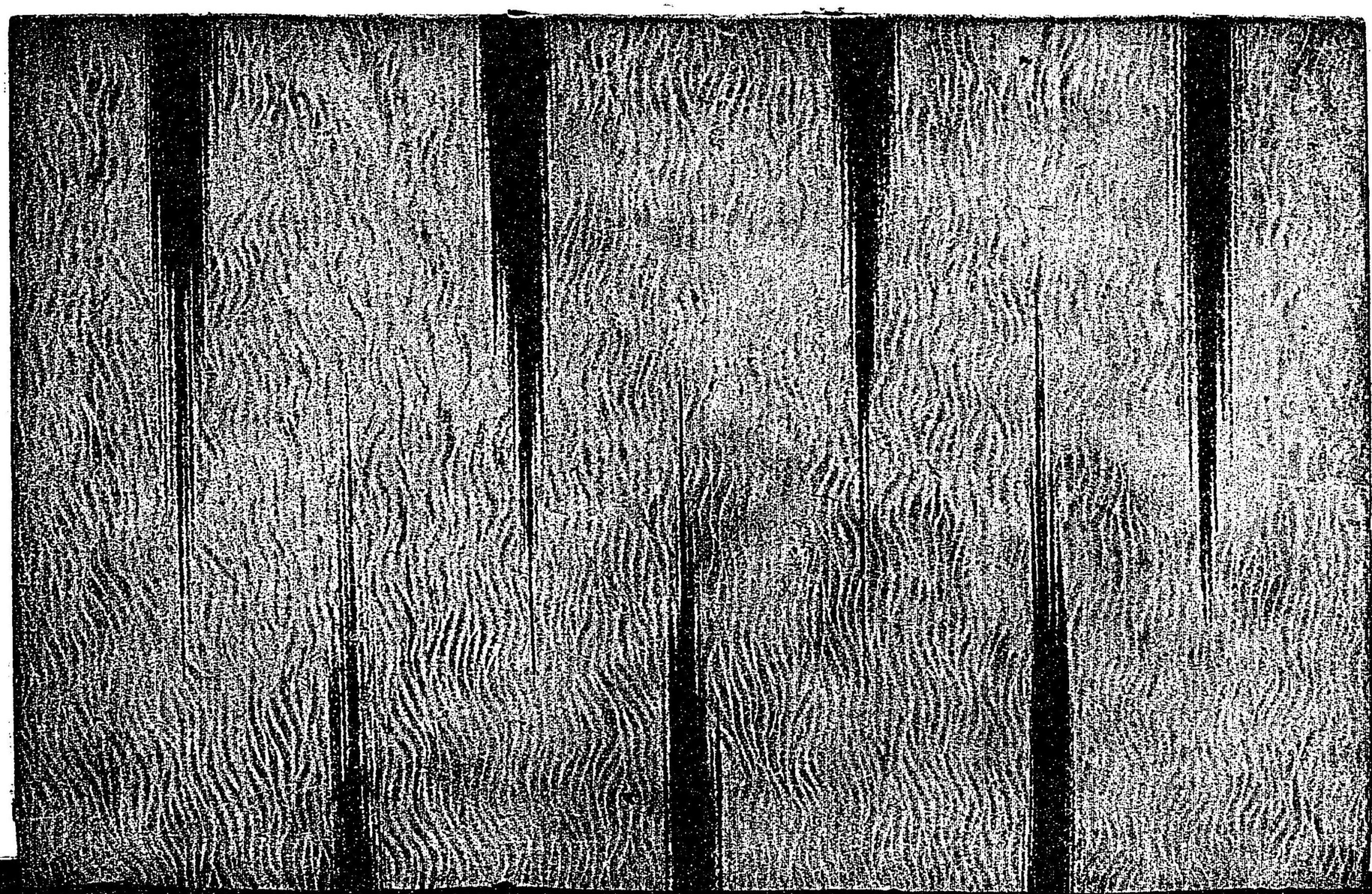


216
188

明治參拾貳年六月廿五日從出版御届濟
同　參拾四年一月廿八日迄再版御届
同　四拾四年五月二十五日

復製不許

訂正者　觀世清

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町角　檜常之助

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂